



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	日本語の構文的特徴から見えてくるもの：「主体・客体」と「自分・相手」
Author(s)	加藤, 薫
Citation	文化学園大学紀要. 人文・社会科学研究 20(2012-01) pp.1-13
Issue Date	2012-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/1354
Rights	

日本語の構文的特徴から見えてくるもの

—「主体・客体」と「自分・相手」—

加 藤 薫*

Structural Characteristics in Japanese Sentences

Kaoru Kato

要 旨 日本語にあっては「文」の成立に占める「主語・目的語」のウェイトが英語等に比べると軽い（省略、自動詞表現への傾斜、二重主語構文、ウナギ文等の存在）。日本語は、「主体」と「客体」を設定して「文」を組み立てようとする志向が希薄であると言える。いっぽうで、日本語には、敬語、多様な人称表現、授受益を表わす補助動詞、授受動詞「あげる・くれる」の使い分け、終助詞、あいづち等の、英語等においては存在しないか存在はしても日本語におけるよりずっと存在感の薄い表現が認められ、「文」の成立上重要な位置を占めている。これらの表現は、いずれも話者本人すなわち「自分」と「相手」との関係性をめぐるものである。

日英両言語の違いはウェイトの置かれる側面の違いとして理解できる。そして、構文上のウェイトの置かれ方の違いから見えてくるのは、世界を成り立たせるもの（「主体」）の設定・表現に拘りを見せる分析的な志向を持つ英語に対して、「自分」と関係を取り結ぶ「相手」との関係性の表現に拘りを見せる相手志向性を強く持つ日本語の姿である。なお、今回焦点を当てた日本語の姿と日本文化論で指摘されてきた「恥の文化」等の日本人の姿との関連については今後の課題としたい。

キーワード

0. はじめに

日本語において自然な「文」が成立するために重要な役割を果たすのはどのような要素なのか。そのような問題意識から日本語の特徴について考えてみたい。

日本語の特質に触れた論考のひとつに外山滋比古氏のものがある。氏は日本語の省略性に着目し、ヨーロッパの言語は（話の筋道がはっきりとした線状をなす傾向が強い）「線的論理」を表すのに対して日本語は（話の筋道の要点のみが言語化される傾向の強い）「点的論理」を表すとする（『日本語の論理』中公叢書、1983年、p.8～23）。

この氏の説は日本語の一面を鋭くとらえたものではあるが、日本語には省略性の一方で「付加性」も認められることにも目を向けるべきであると考え。また、日本語に省略性が認められる

* 本学准教授 日本語学

として、省略される成分にはどのような性質が認められるのだろうか。

以下では、日本語において自然な「文」が成立するための条件（つまり、構文的特徴）を、その省略的な側面（凹的側面）と付加的な側面（凸的側面）の両面をにらみながら考えていきたい。

1. 省略的側面（凹的側面） — 主体・客体関係

1.1 主語と目的語の省略

日本語においては英語などと違い、主語と目的語は「文」成立のための必須的な成分ではない。次の例のように、表現しなくても相手に伝わるならば省略される。

- (1) 「あした、行きます？」
「ええ、もちろん行きますよ。」
(主語の省略)

- (2) 「A社の鈴木部長って、知ってます？」
「いやあ、存じませんが。」
(主語と目的語の省略)

例文 (1), (2) は、日本語として十分に自然な「文」になっている。

ちなみに、盛文忠氏による『雪国』冒頭四十文前後の調査によれば、日本語原文では主語が表示されているのは55.8%、それに対してサイデンステッカー氏による英語訳では98.0%である。中国語については三つの対訳が調べられているが、主語が表示されているのは、85.7%（中国語訳1）、92.3%（中国語訳2）、85.1%（中国語訳3）という結果が出ている（「日本語の主語と中国語の主語はどう違う？」『月刊言語』2006年5月号）。

1.2 自動詞表現への傾斜

英語等では他動詞表現が使われるのに対して日本語では自動詞表現が使われる場合がある。池上嘉彦氏がかねてより注目してきた現象である（『「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店、1981年）。

- (3) (子どもがミルクをこぼしてしまって)
「あ、ミルク（が）こぼれちゃったよ。」
⇔ “Oh, no, she spilled the milk.” (子どもがミルクをこぼしてしまったよ。)

- (4) 彼は戦争で死んだ。

⇔ He was killed in the war. (彼は戦争で殺された。)

(3) や (4) 例のように、同じ状況を表現するのでも、英語では他動詞構文を使い、その事態を成り立たせる「主体」の存在が意識されるのに対して、日本語では自動詞構文が用いられ「主体」の存在が意識されないことがままある。この点をとらえ、池上氏は、日本語には、その事態を引き起こした「主体」(=「起因」)は問題にせず、結果だけに注目する傾向があることを指摘する(池上嘉彦他『自然な日本語を教えるために 認知言語学を踏まえて』ひつじ書房、2009年、p.18～23)。

ここで言えることは、日本語にあつては、主語(=主体)と目的語(=客体)は、省略されるだけでなく、そもそも認知されない場合があるということだ。つまり、主語と目的語によって事態をとらえる枠組みそのものは設定されているのだけれど表現はされない(つまり、省略される)という場合だけではなく、事態を認識するにあたってそのような枠組みそのものがそもそも採られない場合があるということである。

いずれの場合においても、日本語の「文」の成り立ちを考える場合、主語(=主体)と目的語(=客体)の存在感は英語等と比べ希薄であると言うことができる。

さて、事態を「主語」すなわち「働きかけるもの」と「目的語」すなわち「働きかけを受けるもの」の二項構造において理解しようとするのではないという構文上の傾向は、さらに、日本語に特徴的な「文」のあり方としてこれまでもしばしば取り上げられてきた、「二重主語構文」、「ウナギ文」、そして「視覚・聴覚に関わる構文」においても認められる。

1.3 二重主語構文

いわゆる「二重主語構文」とは次のようなものである。

(5) 「僕は夏が好きだ。」

(6) 「ああ、(私は)冷たいビールが飲みたい。」

(7) 「象は鼻が長い。」

英語等においては「主語(S)・動詞(V)・目的語(O)」の枠組みにより表現されるところが日本語ではそれとは異質の枠組みにより「文」が構成されている点に注目したい。ここにおいても、英語等に認められ日本語に認められないのは、「働きかけるもの」としての主語、すなわち「主体」と「働きかけを受けるもの」としての目的語、すなわち「客体」である。

1.4 ウナギ文

「ウナギ文」とは、「ボクハウナギダ」式の「文」を指す。

(8) (そばやで店員に注文している)

「僕はたぬき。」

「じゃあ、わたしはきつね。」

「ウナギ文」においても、英語等では「僕はたぬきそばを注文する。」というような、「主語(～が)・目的語(～を)」の枠組みで表現される(のが通常である)ところが、それとは異質の枠組みで表現されている。

ちなみに、「ボクハウナギタ」式の言い方に関して、池上嘉彦氏は「英語やフランス語にも潜在的に使われるものとして存在しているのであるが、それが実際にどれくらい活用されるかという点、使われる場面に関して、頻度に関して、日本語の対応する場合と較べると、遥かに限られている」と述べている(『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫, 2007年, p.37)。つまり、英語や仏語では、よほどの場合を除きSVOのパターンで表現されるということである。

1.5 視覚・聴覚に関わる表現

視覚・聴覚に関わる表現とは次のようなものである。

(9) あ、星が見える。

(10) あ、鐘の音が聞こえる。

英語等においては、「私は星を見る。」「私は鐘の音を聞く。」といったSVO型構文になるところである。ここにおいても、英語等にあり日本語にないのは、「働きかけるもの」としての「主語」であり、その「働きかけを受けるもの」としての「目的語」である。

以上の考察から、日本語においては、「文」の成立に占める「主語・目的語」のウェイトが英語等にくらべると軽いことが分かる。日本語においては、主語と目的語(働きかける主体とその働きかけを受ける客体)を設定して「文」を組み立てようとする志向が希薄であると言える。

このような日本語の傾向は、主語・目的語(主体・客体)が省略されたり、そもそも設定されることがなかったりするという意味で、確かに、日本語における省略的側面(凹的側面)とすることができる。「はじめに」で触れた、日本語は「点的論理」を表すとする外山説は、日本語のこの側面に注目したものと位置づけられる。

2. 付加的側面(凸的側面) — 「自分」・「相手」関係

いっぽうで、日本語には、以下のような、英語等においては存在しないか、存在はするものの日本語におけるよりずっと存在感の薄い表現が認められる。

1. 敬語
2. 多様な人称表現
3. 授受益を表わす補助動詞
4. 授受動詞「あげる・くれる」の使い分け
5. 終助詞「～ね」
6. あいづち

これらの表現はいずれも、表現者本人(つまり「自分」と「相手」との関係を反映したものである。そして、これらの表現は、以下に見るように、日本語における「文」の成立において極めて重要な位置を占めるものである。以下、一つ一つの表現につき具体的に見ていく。

2.1 敬語

2.1.1 日本語の「敬語」の意味すること

次の例を見ると分かるように、日本語では相手との「上下・親疎」の関係を無視して自然な会話を行うことは不可能である。

(11) (目上の人に対して)

?? 「これはペンだよ。」

(12) (弟・妹・親友等に対して)

?? 「これはペンです。」

??? 「これはペンでございます。」

(13) (目上の人に対して)

?? 「行く？」

(14) (弟・妹・親友等に対して)

?? 「行きますか？」

??? 「いらっしゃいますか？」

これらの例から分かるように、日本語には誰に対してもどんなときにも用いる中立的な文体がない。このことはつまり、日本語にあっては「文」を発する場合には、「相手」との関係性を“表現”しないことには自然な文が成立しないということである。「表現しなくても分かるから」と“省略”することは許されない。

(このような観点から早くに敬語を問題にしたのは、森有正『経験と思想』岩波書店、1977年、p.126～131。なお、初出は「出発点 日本人とその経験 (b)」『思想』568号(1971年))。

ちなみに、日本語のような単語レベルの「敬語」(尊敬語・謙譲語・丁寧語)の体系を持つ言語は、日本語以外では、インドネシアのジャワ語、韓国・朝鮮語くらいであると言われている(インドのヒンディ語には尊敬語に相当するものはある)。

(J.V. ネウストプニー「世界の敬語 ―敬語は日本語だけのものではない―」(林, 南編『敬語講座8 世界の敬語』明治書院, 1974年), 杉戸清樹「世界の敬意表現と日本語」(『国文学 解釈と教材の研究』1988年12月号)

2.1.2 「敬語行動」をめぐる日英比較 ―「中立的」な表現の有無めぐり

単語レベルの「敬語」の体系を持つのは確かにごく少数だとしても、単語の組み合わせによる「丁寧な表現」ならどの言語にも認められるのではないかという立場もある。では、表現レベルで考えた場合、日本語の個性はなくなるのだろうか?この点を考えるために、「敬語行動」をめぐる日・英比較を行った研究を見ておきたい。

井出祥子他(1986)『日本人とアメリカ人の敬語行動 大学生の場合』(南雲堂)は、日米の大学生それぞれ約500人を対象に、日常接する様々な相手に、ペンを借りるときにどのような表現を使うかをアンケート調査し、その結果を分析したものである。

井出他(1986)では、日本語と英語それぞれについて約20の表現を考察の対象とする。そして、それらの表現の「丁寧度」の違いを問題にする。「丁寧度」は、「最も改まった時」に用いられるものの丁寧度を5、「もっとも気楽な時」に用いられるものの丁寧度を1とする5段階評価によるアンケート調査によって算出される(p.33)。また、人物カテゴリーも20設けられ、その丁寧度も同様に算出される(p.34)。日米双方とも、最も丁寧度が高い人物カテゴリーは「教授」であり、最も丁寧度が低いのは「弟・妹」であった(p.99)。

日本語における特に丁寧度の高い表現としては、「お借りしてもよろしいでしょうか」「貸していただけませんか」等があり、英語のほうでは、“May I borrow”“Would you mind if I borrow”等がある。いっぽう、丁寧度が特に低い表現としては、日本語では、「借りるよ」「貸して」「ある」等があり、英語では、“Can I Steal”“Let me borrow”“Gimme”などである(p.118)。

井出他(1986)によると、「ある表現をどのような相手に使うか」という観点から見た場合、英語にも一定の使い分けが認められる。すなわち、“Can I Steal”“Let me borrow”“Gimme”等の特に丁寧度の低い表現は、アルバイト仲間や親友や兄弟等の気楽な相手にしか使われないし、逆に、“Would you mind if I borrowed”“Do you mind if I borrow”のような表現は、気の張る相手には使われるが、気楽な相手にはふつう使われないという結果が出ている。英語にも家族や親友などにしか使えないぶっきらぼうな表現と、逆に、家族や親友にはふつう使われない持って回った丁寧な表現があることが分かる(p.118～132)。

しかし、ここから単純に、英語にも日本語と同じように「敬語」が存在するとするのには問題があると筆者(加藤)は考える。確かに、上に見たような部分だけを見ると、英語も日本語も変

わらないのではと思いたくなるが（敬語を日本語の特徴とすることを否定する研究者もいる。城生 佰太郎・松崎 寛（1995）『日本語「らしさ」の言語学』講談社，p.149～154），しかしながら，英語では，“Could I borrow a pen?” “Can I borrow a pen?” “Can I use a pen?” 等の丁寧度中位の表現では，もっとも気の張る相手からもっとも気楽な相手までのすべての相手にほぼ均等に使われるという井出らの調査結果が出ていることに留意したい（p.118～132）。さらには，もっとも丁寧度が高いとの結果が出ている“May I borrow”であっても，確かに気の張る相手に比較的使われる傾向は認められるものの，いっぽうで，アルバイト仲間や親友や恋人といった「ごく気楽な相手」にも使われているのである（同上）。それに対して，日本語においてももっとも丁寧度が高いと考えられる「お借りしてもよろしいでしょうか」はアルバイト仲間や親友や恋人といった「ごく気楽な相手」に使われることなど通常の状況では考えられない。

以上に見てきた井出他（1986）の調査・分析をもとに英語についてまとめると，特別にぞんざいな表現がありそれらは特定の相手にしか使われない傾向があるものの，いっぽうで，①丁寧度が最上の表現でも幅広くいろいろな相手に用いること，②どのような相手にも用いる「中立的」な表現が存在するということが指摘できる。

それに対して，日本語では，①丁寧度の高い表現はあくまでも目上や初対面等の気の張る相手にしか用いられないし，②誰に対しても用いることができる「中立的」な表現は存在しない。

これらの点から，「相手」に応じて表現の丁寧度を調節しようとする傾向は英語にもないわけではないが，日本語の方がその傾向をより強く持つということができよう。

以上，「敬語」の存在は，単語レベルにおいても（2.1.1），表現のレベルにおいても（2.1.2），日本語における「付加的要素」（凸的側面）として注目される必要があることを述べた。

2.2 人称に関わる表現

敬語と同じような性質を持つものともう一つ注目すべきなのは，人称に関わる表現である。鈴木孝夫氏（『ことばと文化』岩波新書，1973年）や木村敏氏（『人と人との間 精神病理学的日本論』弘文堂，1972年）等によりつとに問題にされてきたように，日本語においては，一人称の代名詞にも「わたくし・わたし・俺・僕・あたし」等があり，敬語と同様，相手との「上下・親疎」の関係を反映し使い分けられている。二人称の代名詞「あなた」はあるにはあるが，特に目上の相手には使い難い。三人称の代名詞「彼・彼女」も特に目上の相手には使いにくい。このように，日本語には，英語における I・you・he・she のごとき，誰に対しても用いられる中立的な人称詞は存在しない。

「相手」との関係を反映させての人称の“活用”は日本語の構文上必須的な要素とすることができる。ここにおいても，「相手」との関係性を反映させないと自然な「文」が成り立たない，ということが認められるわけである。これも，日本語における「付加的要素」（凸的側面）として注目される必要がある。

2.3 受益感情を表わす補助動詞

次の例文は留学生の作文の中に出てきた例である。

(15) ??「渋谷で道に迷っていたら、男の人が声をかけて、私を駅まで連れて行きました。」

表現者が「相手」に対してごく普通の感謝の気持ちを抱いているとしたら、自然な「文」とは言いにくい。受益者の立場に立った場合、「～てくれる」「～てもらう」といった受益感情を表す補助動詞を付加しないと自然な「文」が成立しにくくなる。つまり、日本語では、誰かの「お世話になった」場合は、それに対する感謝の気持ちを「文」の中に明確に表現しないと自然な日本語として成り立たなくなるというわけである。ここでも、「わざわざ表現しなくても伝わるはず」と“省略”することは許されない。日本語においては、受益者の立場に立ったときは「～てくれる」, 「～てもらう」を使い、相手に対する感謝の気持ちを表現することが「義務的」と言える（日本語教育では一般にこのような立場から「～てくれる」等の表現が教授されている）。

「～てくれる」「～てもらう」「～てあげる」といった恩恵性を表す表現は、そもそも欧米の言語や中国語には見当たらない。山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ — 「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』（明治書院）によると、日本語以外に授受の補助動詞を用いて恩恵性を表わすのは、韓国語、ヒンディ語、モンゴル語、カザフ語などかなり限定された言語に限られる（p.341～355）。

しかも、それらの言語も日本語に比べると用法が限定的であることが山田（2004）に指摘されている。例えば、（韓国語は日本語と文法的に共通する要素が多い言語だが）「～てあげる」と「～てくれる」の区別はなく、また、「もらう」に相当する動詞を用いて「～てもらう」のような表現をすることは通常ないとされている。ヒンディ語も、韓国語と同様、「～てあげる・～てくれる」を一つの形式で表わし、「～てもらう」に相当する表現を持たないそうである。カザフ語は「～てもらう」に相当する形式を持つが、「～てあげる」と「～てくれる」をひとつの形式で表わす（同上）。

受益感情を表す表現が義務的なものとして存在し、しかも、「～てあげる」「～てもらう」「～てくれる」と三つの形式（その敬語形は除外しても）が使い分けられる。これまた、日本語における「付加的要素」（凸的側面）として注目される。

※「あげる」と「くれる」の使い分けについては、次節で取り上げる。

なお、被害者の立場に立った時は、日本語においては、受身構文（迷惑受身）が義務的に用いられる。

2.4 授受動詞「あげる・くれる」の対立

同じく「与え手」主語の場合でも、日本語では、自分の立場（＝相手との関係性）が与え手側

なのか、受け手側なのかで動詞を使い分ける。

(16) 私は鈴木さんに本をあげた。(主語 = 与え手, 話者の立場 = 与え手)

(17) 鈴木さんが私に本をくれた。(主語 = 与え手, 話者の立場 = 受け手)

英語, 中国語, そして韓国語でも, 与え手「主語」の場合, 「自分」の立場に関わりなく, 一つの動詞が用いられる。英語では「give」, 中国語では「給」, 韓国語では「주다 (チュダ)」となる。日本語のような使い分けはされない。

Newman (1996) は, 授受動詞としての「give」に相当する表現について世界の 100 を越える言語について調査を行っているが, 日本語の「あげる」と「くれる」のような区別をする言語は, 日本語以外ではアフリカのマサイ族の言語のみであるとしている。

(Newman, John. 1996 *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin: Mouton de Gruyter. P.26 ~ 27)

ここにも, 他のほとんどの言語では表現されることのない「相手との関係性」が日本語では義務的に表現されるという意味で, 「付加的な性質」が認められると言えるのである。

なお, 「あげる・くれる」の特質としてひとつ付け加えておきたいのは, その意味が「恩恵」の授受に関わるという点である。

(18) 「× (被害・罰・損害) をあげる・くれる」

という言いかたは成り立たない。つまり, 日本人は自分が恩恵を施す側なのか施される側なのかにこだわりを持つと言えるのだ。ちなみに, 「恩恵」の授受に限定されるとの制限は, 辞典を調べ, 身の回りのネイティブに確認した限りでは, 英語の「give」, 中国語の「給」, そして韓国語の「주다 (チュダ)」には認められないようである。

2.5 あいづち

(19) A 「あのですね」

B 「はい」

A 「きのう仕事で新宿に行ったんですがね…」

B 「ええ」

A 「帰りに高島屋に寄りましてね…」

B 「ほう」

A 「世界のワイン展というのをやっていますね」

B 「はあ」

日本語では (ことばによる) あいづちが英語の 3 倍多く打たれるというデータがある。韓国

人、中国人に対しては1.6倍という報告がある。

(英語との比較は泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版(p.157), 韓国語との比較は任榮哲・井出里咲子(2004)『箸とチョッカラク』大修館書店(p.52), 中国語との比較は水野義道「中国語のあいづち」『日本語学』1988年12月号による。)

また、日本語のあいづちの質的な特徴としては、次のような点が指摘されている。

- ・文の途中のあいづちが目立つ。英語では、ほとんどが文末に現れる(『会話分析』p.162～163)。
- ・韓国人とは違って日本人は反対意見を述べている者にもあいづちを打つ(『箸とチョッカラク』p.57～58)。

あいづちに関しては、「日本語にはあるが○×語には認められない」というものではないし、あいづちがないと「ただちに自然な『文』ではなくなる」というものでもないが、相対的に多用される点において、日本語の特質をなすと言える。

2.6 終助詞「ね」

2.6.1 終助詞「ね」の役割

(20) 妻「冬ももう終わりね」

夫「ああ、もうすぐ春だ」

妻「思い出すわね、新緑のあの教会。私たち、そろそろ銀婚式ね」

夫「そうだ。今年の5月だ」

妻「どこか、記念に海外旅行でも行きたいわね」

夫「ああ、そうだ。どうせなら外国がいい」

(守屋三千代他『日本語運用文法』凡人社(p.216)より借用)

上の対話例の夫の発言を見ると分かるように、終助詞の「ね」がないと、自然な「文」として成り立ちにくくなる。「～ね」を付けて、「私ひとりがそう思っているのではなく、あなたと同じようにそう思っています」という表示が必要とされる。日本人が自分の考えを述べる場合、自分の考えをただそのものとして提示するのではなく、いかに「相手との関係性」に気を配りながら話しているかが理解される。

2.6.2 「ね」と「you know」

英語において「ね」に相当する表現はないのか。あるとして、どのくらいの頻度で用いられるものなのか。そのような疑問に答えようとした研究として、「ね」と「you know」等をめぐる泉子・K・メイナード氏の実証的研究(『会話分析』くろしお出版, 1993年, p.101～117)を見ておく。

そこでの分析資料は次のように得られたものだ (p.81 ~ 89)。

日米とも、協力者は全員ネイティブの大学生で、同性の成人2人を1組として会話をしてもらおう。男女10組ずつ計20組、全部で40名が参加。

会話は各組30分行ってもらい、その様子を録画。分析の対象にしたのは最冒頭の2分間を除外し、それに続く3分間。

20組×3分で、日米それぞれ40人の参加による60分間分のデータが用意されたことになる。得られた「文」は日本語、1,244、英語、1,281。

結果、英語の1,281文中、「you know」の出現総数は、60 (p.112)。いっぽう、日本語の終助詞(間投助詞)は、1,244文中、「ね」364、「さ」148、「の」138、「よ」128、「な」49、その他36で、計、863 (p.102)。両者の出現数には、10倍以上の差が認められる。

また、注目されるのは、「you know」を使っているのは、女性の75%、男性の45%で、使用していない人もいることだ (p.112)。「教養ある中流階級以上の人々がこれを蔑視し、嫌っている」(柳父章:p.345)とまで言っていていかどうかはともかくも、「you know」が日本語の終助詞のような、「それなしでは自然な会話が成り立たなくなる」といった存在でないことは確かであろう。

(柳父章(1993)「日本語の表現構造とその世界化の可能性と限界」『日本型モデルとは何か』(濱口恵俊編, 新曜社))

ここで「ね」以外の文末表現にも目を広げて見てみよう。日本語の1,244文の文末表現で最も多いのが終助詞付で終わるもの(436)。「じゃない」「でしょう」等の終助詞に働きの近いもの(121)。この二つを合わせると約45%にのぼる。「～て」「～から」「～けど」などの接続助詞が文末に来ている言いさし表現(163)も目を引く (p.119 ~ 121)。

メイナード氏は、「終止形ではなく、「一て形」で終わる理由は、よく言われる様に発話の終わりに余韻を残し、相手に自分の見方や考え方を押し付けないようにする戦略ーと見てよいと思う。同じ様に接続詞で終わる表現も、文末をなるべくぼかして終わらせたいという意思の表れのように見える。」(p.121)と述べている。

以上のほかに、「言いよどみの類」、「わけ」「もの」などの形式名詞で終わるもののように、何らかの対人配慮的な要素が認められるもの(「聞き手めあての表現」(p.213))を足し合わせると、全体の約9割に達する。対人的な配慮がゼロとも言うべき用言の終止形が他の要素を伴わないでそのまま文末表現となったケース(メイナードは「裸のダ体」と呼ぶ)は、145/1,244と全体の11.98%に過ぎなかった(同上)。

では、英語の文末表現を見た場合、どのようなことが言えるのか。興味深いことに、英語では、「聞き手めあての感情表現のついたもの」が1,281文中29で、「命題表現のみ」が1,152と、日本語とその比率を逆にするのである。「聞き手めあての感情表現のついたもの」の出現割合

は、わずか 2.26%である (p.124 ~ 126)。

以上に見たメイナード氏による「ね」をはじめとする文末表現の日・英対照研究からも、日本語においては「相手」との関係性が「文」の成立において如何に大きなウェイトを占めた存在であるかが分かる。

なお、ここで「聞き手めあての感情表現」に数えられているのは、

- 1.“you know” “right” “OK” 等
2. 付加疑問
3. 相手をファーストネームで呼ぶ。
- 4.“or something” “like” などのあいまいさ、躊躇を表わす表現を文末に加える。
5. 接続詞 “though” や “but” を文末につけて表現を和らげる。

等のものである (p.124)。

3. 結語：「文」の成り立ち方から見えてくるもの

以上、日本語において自然な「文」が成り立つために必要な成分とはどのようなものなのかを主に英語との対比を意識しながら見てきた。これまでに見てきたことを図式的に示すと、以下のようになる。

日本語	主語→目的語	自分・相手
英語	主語・目的語	自分←相手

すなわち、日本語の「文」においては、英語等に比べ「主語・目的語関係」の占めるウェイトは相対的に軽く、いっぽうで、「自分・相手関係」の占めるウェイトが重い。それに対して、英語の「文」においては、「主語・目的語関係」が占めるウェイトが重く、「自分・相手関係」の占めるウェイトは極めて軽い。

両言語の違いは、ウェイトの置かれる側面の違いとして理解される必要があるだろう。

目的語を伴う主語とは他動詞の主語ということである。他動詞の主語は対象に働きかけ、事態を成立させる「起因」と言える。日本語の「文」の成り立ちにおいて、「他動詞の主語」の影が薄いということは、「事態を成立させる起因」を析出し世界を見ていこうとする志向 (= 分析的な志向) の弱さを意味すると言える。

(注：この点についての指摘は池上嘉彦他 (2009) 『自然な日本語を教えるために 認知言語学をふまえて』(ひつじ書房)にある (p.22)。)

いっぽう、日本語においては敬語や終助詞をはじめとする対人志向的な要素が豊富に存在し、しかも「文」成立のための重要な成分になっている。日本語における「文」の成立に占める「相

手」の存在の大きさは、とりもなおさず、日本人にとっての「相手」の存在の大きさ（「相手」指向性の強さ）を意味するのではないか。

構文のあり方の傾向の違いから見えてくるのは、世界を成り立たせる「起因」の設定に拘りを見せる分析的な志向を持つ英語に対して、「自分」と関係を取り結ぶ「相手」との関係性の表現に拘りを見せる相手志向性を強く持つ日本語の姿である。

なお、今後の課題としては、今回の考察で浮かび上がってきた日本語の特徴を日本文化論・日本人論の枠組みの中で考えて行きたいと思っている。

文化人類学者のルース・ベネディクトの指摘する日本における「恥の文化」の問題と、今回の考察で浮かび上がってきた「相手志向性を強く持つ」日本語の姿との関連に注目している。